

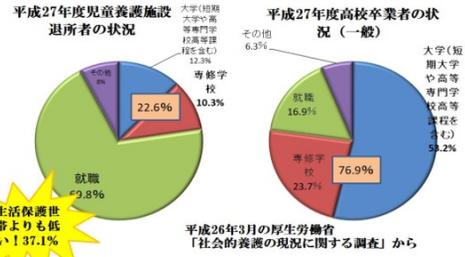
児童養護施設で暮らす子どもにとっての学習支援ボランティア — 関わりから生まれる安心、まずな、希望 —

兵庫県立大学環境人間学部4年 笠松真衣(所属：臨床心理学研究室 指導：井上靖子)

問題と目的

日本社会では、現在、虐待や経済的理由で、親元を離れて、児童養護施設で暮らす子ども達は2万5千人いる(厚生労働省, 2019)。施設で暮らす子ども達は、学習に課題を抱えている(厚生労働省『児童養護施設運営ハンドブック』)。親からの適切な養育を受けていないため、学習意欲が乏しかったり、学習習慣がついていない、施設職員の人手不足によって、学習指導が十分できていない(松村・永吉, 2017)等である。本学生は、こうした子ども達に何か力になれないかと学習支援ボランティア活動を始めた。本研究では、子ども達と学生との関わりを通して、子ども達の言動や態度などの反応からボランティアの意義について考えることを目的とした。

進学率にみる子どもの現状



研究方法

児童養護施設Aにおいて2018年11月から現在に至るまで1年間、週1回、15時から17時半の間で、小学生の男子5名と女子4名に対して学習支援を行ってきた。本学生が関わるなかで、子ども達の発言や表情などの反応を通して、ボランティアの意義を考えることにした。ここでは事例を通して課題点のみ取り挙げる。

実践過程

学習場面①

小5女児Aちゃん



①「宿題一緒にしよう〜」

③(机に突っ伏して)「わからんわけじゃないけれど横におって見てほしいねん」

②「うん。でも今は、Bちゃんを見てるから、分らんところがあつた呼んで」



学習場面②

小3女児Bちゃん



①「もう宿題したくない」

③「こんなん一生終わらへん」

⑤(反応なし)

⑦「そんなん知らん」(机に突っ伏す)

⑨(顔をあげて)「そんなん簡単やし」

②<いきなり、どしたん?>

④<いつもちゃんと、終わらせられとるやん>

⑥<去年九九いっぱい言えとったやん>

⑧<あれ、Bちゃん、4の段も言えんくなっちゃったかー。去年言えとったのになー>



学習場面③

小2男児Cくん



①「お姉ちゃんって勉強の時しかおらんの?」

③「じゃあオニゴもうできひん?」

⑤(嬉しそうに)「じゃあ早くおわらせるからオニゴしてな!」

②<んーまあ、基本的には宿題の時やな>

④<みんなの宿題が早く終わって時間があつたらオニゴできるで>



考察

1. 学習場面を通して、子ども達は勉強より、「見守ってくれる人」を欲していた。学習室は全員に目が届くように配慮はなされており、決して、1人の子どもに集中しているときに、他の子どもがみれないということではない。したがって、子ども達は、単に視覚的に見てもらうことではなく、自分だけに興味や注意を向けてほしいと切望していると考えられる。
2. 子どもたちにとって、「宿題が早く終われば学生と遊ぶ時間が増える」というのは宿題をするモチベーションにもつながっている。また、遊び時間は考察1で述べた自分だけに興味や注意を向けてくれる時間にもなると考えられる。
3. 施設の子どもの学習が遅れがちなのは、良い将来像のモデルがなく、安心し、信頼できる他者からの励ましが無いことが挙げられる。学習支援において、こうした子ども達の関心を向けてほしい気持ちに配慮した声かけの工夫を考えていく必要がある。

今後の課題

ふりかえり

施設の子ども達にとっての学習支援の意義を単に学習だけではないことを、施設職員や他のボランティアとも共有し、子どもにとってより良い学習の場の在り方を探究していく。



() 知識構築スキル
…「問い」を立てて探究し
自身で知識を積み上げる



(○) 自己成長スキル
…ものごとをやり遂げ
自分を肯定する



(○) 人間関係スキル
…他者と協力しながら
ものごとを進める



(○) 課題解決スキル
…問題を解決するために
目標と計画を立てて実行する

ボランティア活動を通して、特に苦勞したことは子どもたちの感情の変化である。笑っていた子が突然怒ったり、子ども同士仲良さそうにしていたのに突然喧嘩を始めたりと、子どもたちの感情の振れ幅に非常に苦勞した。また、そういう時にどういふ言葉をかけたらよいか未だに試行錯誤を繰り返している。しかし、その分課題解決スキルや人間関係スキルを特に伸ばせたと感じている。